

ブラジルへの道

川合 慶一

1994年は、一年のうちに金環・皆既の両方を見ることができたという意味で、私にとって思い出深い年でした。しかも二度とも、ある意味で非常な幸運に恵まれたと思っています。一度目は金環蝕帯から100kmそこそこの所に、留学中の友人が住んでいてくれたこと、そして二度目のときには多くの在日ブラジル人の助けをかりることができたことでした。

1991年のメキシコ行きに備えて英語とスペイン語をいくらかでも身につけようとしていた頃でした。近くにある末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教会）で外国人宣教師の方々による英会話教室が週二回開かれていたので、私もそこへ通ってみました。しばらくたつうちに気がついたのですが、教室が終わるといつも、英語とは明らかに響きが違う言葉を話しながら、自転車に乗って帰って行く一団がありました。それぞれの顔だちは日本人的な人から日本人離れた人まで様々です。初めのうちはそれほど気にも留めませんでした。あるとき思い切って、どこからきたのか尋ねてみました。

「私たち、ブラジルから来ました。」

多少なまってはいましたが、彼らのうちの一人が日本語ではっきり答えました。それが何十人という在日ブラジル人との友達づきあいの始まりだったのですが、そのときにはまだ、彼らのうちの何人もが、3年後の私のブラジル行きを助けてくれるとは思ってもみませんでした。

翌年の5月、平塚に新しいブラジル料理の店がオープンしました。英会話に通っていた日系ブラジル人三人姉妹の上の姉さんが、ご主人と一緒に始めた店です。私も開店早々お招きにあずかったので、友人と二人で早速のぞきに行ってみました。当時の私にとって、外国人ばかりの店に入っていくことはかなり勇気のいることでしたが、知った顔が少なくとも三人はいるという安心感が、壁を乗り越えさせてくれました。幸い私は、見知らぬ食べ物にもそれほど抵抗がないので、末の妹さんが少々心配顔で出してくれた「おすすめメニュー」をたちまちたいらげ、ブラジルの食べ物についてどう思ったかという質問に答え、日本人ということでほかのブラジル人のお客さんに珍しがられながら店をあとにしました。

それが縁で、その後もときどきその店に立ち寄ってみました。毎週末にはかなりの繁盛で、平塚ばかりでなく隣の茅ヶ崎、寒川、伊勢原あたりからもブラジル人やペルー人たちが詰めかけました。そんな中へ一人で入っていくと、日本人と聞いて初めは誰もが非常に珍しがり、私がふだん通りの受け答えをすると、驚き、そして喜んで彼らの席に迎えてくれたものでした。彼らが私のどこをそんなに珍しがっているのか興味がわいたので尋ねてみたところ、今までに

出会った日本人で、日本人どうしですのと同じように自分たちと一緒に話したり、食事をした人は珍しい（または初めて）からだと言われてくれました。こうして私は彼らに仲間として、またあるときには相談相手として受け入れられたのです。今回の南米日蝕まであと2年余りとなった頃でした。

「僕がもしアメリカやヨーロッパの人のような白人だったら、さもないと黒人だったら、女の子たちも僕にもっと話しかけてくれるのかもしれないね。」

ある若者がふと口にした言葉が今でも心に残っています。自分はどこの国の人たちにも絶対にそう思わせるような態度はとるまいという教訓として。

「ブラジルに帰ったら、日本で稼いだお金でこんなことをしてみたい。」

彼らは私に自分の夢や将来の希望を話してくれるようになりました。そして当然のように、私の夢や希望、好きなことなどいろいろと尋ねてきました。

「私は月や星をながめること、花を育てて咲かせること、それから旅が好きですよ。そうだ、あと2年たったらブラジルで皆既日蝕が、その次の年には金環蝕が見られるんだ。行ってみたいな。」

皆既日蝕と金環蝕についてはいくらか説明を要しましたが、どうやら彼らに理解してもらうことができました。幸い年配の方の中に体験者があり、皆既かどうかはわからないが昼間に薄暗くなった（1947年5月20日と言ったら、その頃だという返事が返ってきました）という話を聞くこともできました。

その頃私は皆既や金環の見られる都市の名をはっきり知らなかったもので、どこで見られるのかという彼らの問いに、だいたいこのあたりというような答えしかできませんでした。すると彼らのうちの何人かは、間違いなくブラジルで見られるんだと念を押したあとでこう言いました。

「うちへ遊びにきて、私の家族や友達に会ってください。ブラジルでのことはうちでなんとかします。」

そのときまでいくらか迷っていた私の心は、この言葉を聞いてはっきり決まりました。

「次の日蝕はブラジルで見よう。」

それからの2年間、機会を見つけては私は彼らに当地の事情をいろいろと尋ねてみました。1994年に入って、「日食情報」などで皆既帯に入る町の名が具体的にわかるようになってからは、彼らもより話しやすくなったようです。ただ、彼らの中で、国内旅行の経験者が意外に少なく、サンタ・カタリナ州やイグアスの滝について直接的な話はなかなか聞くことができませんでした。それでも彼らは自分たちの身内や友人にあれこれとあたってくれたようです。

「とにかくサン・パウロまで行って下さい。どこの町へ行くかということは、それからでも充分間に合います。たとえ飛行機やバスがいっぱいでも、車でどうにでもなりますから。」

そういった、具体的ではないにせよかなり楽観的といえる考えが大部分だったので、私もとりあえず早めにブラジルへ入国し、どこかに腰を落ち着けさせてもらって、それから最も確実な方法を現地で考えてみようと思いました。シンガポール航空～大韓航空乗り継ぎの往復航空権を158,000円で都合し、友人の村上幸子Reginaさんをお願いして、彼女のご両親のところにお世話になることにしました。ビザもとり、日本での仕事を終えてすでに帰国していた友人たちにも連絡をとり、村上さんご夫妻にサン・パウロ着の便名と到着予定時刻を連絡しました。出発前には、ブラジル人たちから家族や友人に宛てた手紙や小物をいくつも預かり、二人は成田空港まで見送りにきてくれました。出発は10月26日の夕刻でした。

サン・パウロのガアルリョス空港では、早朝にもかかわらずReginaさんのお母さんの富枝さん、お兄さんのEduardoさん、富枝さんの親友でやはり娘さん夫婦を日本へ仕事にやっていた島本さんご夫妻が出迎えて下さいました。すぐに村上さん宅へ案内され、ご主人の知行さんの出迎えをうけ、重い荷物を下ろしてひと休みしてから、富枝さんが腕をふるったブラジル料理を腹一杯ごちそうになりました。お二人とも日本語が達者で、Eduardoさんも日本語は不得手でも英語は得意だったので、会話に不自由はありませんでした。10月いっぱい、こうして長旅の疲れをいやしている間に、Eduardoさんがクリシウマ行き夜行長距離バスの乗車券を手配してくれていたのが、31日の夜にはクリシウマへ向かうことができました。サン・パウロの夜空は橙色の光がこもったような明るい空でしたが、街を離れると、満天の星がバスの窓をいろどりました。シリウスより早く昇る青白いカノープスや南天高いアケルナル、足からまっすぐ昇ってくるふたご、大小マゼラン雲……。

夜が明けると曇り空でした。フロリアノポリスでバスを乗り継ぎ、クリシウマには1日の昼頃に着きました。Eduardoさんがすぐに宿を見つけてくれたので、うろうろと歩きまわらずにすみません。翌日はブラジルのお盆にあたる祭日で、近くの店はほとんど休み。それでも昨日とは違って変わって青空が広がり、日蝕当日への期待がふくらみます。午後から近くの炭鉱跡を見学に行きましたが、見終わって坑内から出てくると、日本人観光客がおおぜい。天文ガイドツアーの方々でした。そこで出会ったサン・パウロ在住の獣医さんご夫妻と意気投合し、明日とっておきの観測場所へ案内するから日蝕を一緒に見ようと誘われました。また、その夜開かれる日蝕観測者のためのパーティーにも誘っていただきました。その獣医さんは、日本にいる娘さんが送ってくれたという日の丸餅巻三本セットを自慢気に取り出し、そのうち「神風」というやつを頭に巻くと、ハンドルを握り、私たちを宿まで送ってくれました。彼は非常な日本びいきであるらしく、パーティーの席でも「日本はすごい国だ。フビライ・ハーンの侵略を神風を吹かせてしりぞけたのだから……」と早口の英語でまくしたてました。彼のおかげで

私たち一行は思いがけないごちそうにありつくことができ、面白おかしいひとときを過ごすことができました。パーティーも終わり夜もふけて、双眼鏡で星を眺めていると、オートバイ二人乗りの少年が“Eclipse?” とひやかしていきました。

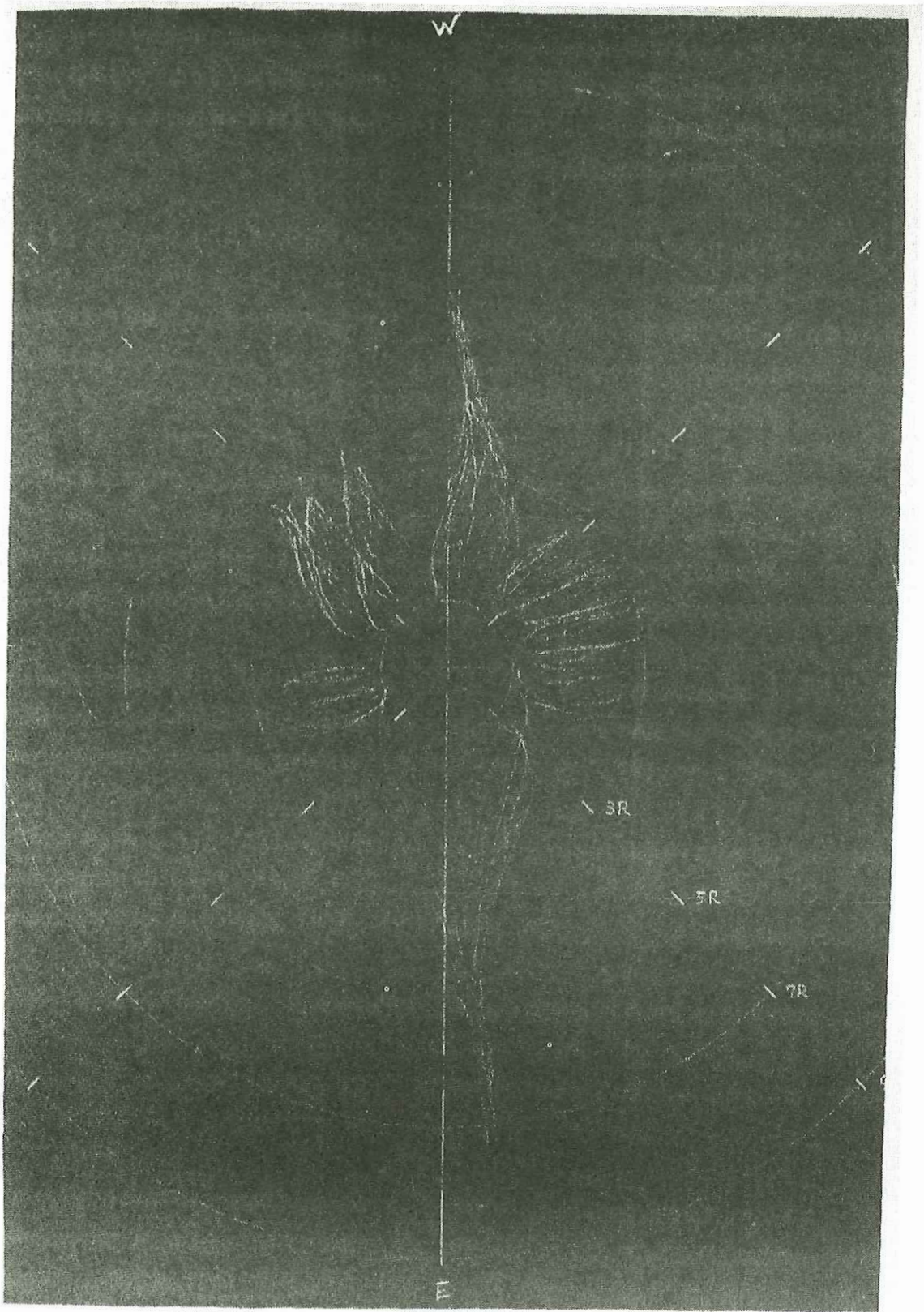
翌日案内されたのは、クリシウマから東へ、国道101号線の下を通ってさらにしばらく走った丘の上にある小さな牧場でした。温厚そうなご主人と奥さん、まだ小さな子供たち、それに隣近所の二家族も一緒に迎えてくれました。快晴の下、360°の展望と三家族とに囲まれて私たち一行は日蝕の全経過を完璧に見ることができました。獣医氏は牧場の動物のふるまいを観察し、私はコロナのスケッチをとり、村上さん親子と獣医氏夫人は双眼鏡でコロナを眺めていました。メキシコで使ったゲージ入りの双眼鏡で、東側のストリーマーがおよそ8Rまで延びているのがわかりました。また、ポーラプリュームの明るいところと暗いところが交互に並んだように見えたのも印象に残っています。4分間は、あっという間でした。

サン・パウロに戻ったあとも、私はあちこちの町で旧知の手厚いもてなしを受け、1ヶ月は夢のように過ぎていきました。パラナ州立マリンガ大学に案内されて、やはり日蝕を観測してきた物理学の教授といろいろ話をしたり、日本からの交換留学生と会ったりもしました。22cm屈折を備えた観測所へも連れていってもらって、夜中まで南天の天体を見せてもらったこともありました。全てが私を慕ってくれた日系ブラジル人と、その家族や親戚、友人たちの心づくしによって実現した旅でした。まだまだゆっくりしたいところでしたが、長らくお世話になったご主人の知行さんに再会を約し、富枝さんほかおおぜいの方々に見送られて11月20日帰国の途につきました。今度は当地でお世話になった皆さんから息子や娘、兄弟や友人に宛てた手紙や小物をたくさんかかえて。

異国から来た心優しき若者たちは、私の帰りをずっと待ちわびていたそうです。聞くところでは、例の店でも週末になると私のことが必ず話題に上ったようでした。また、あとになって聞いた話ですが、Reginaさんは実家の両親に「もし川合さんが日蝕の見える場所へ行かれなかったならば、私は顔を合わせたときに何と言ったらいいでしょうか」と、電話でくれぐれも間違いのないよう念を押してくれていたのだそうです。皆のこの心づかいに、何をもって応えたらいいでしょうか。

彼らとの友達づきあいはもちろん今でも変わりなく続いています。国籍や言葉を超えたつきあいを続けることが、今の私にできるお礼なのかもしれません。

今後も日蝕が縁であちこちの国を訪ねることがあるでしょう。そのときに、たとえ今回のような形でなくとも、訪ねた先の人々と理屈抜きの楽しいつきあいをしたいというのが、私のもう一つの目的なのかもしれません。



コロナのスケッチ 川合 慶一 (一部トリミングしました 編集部)